

浄土



随 想

小野殖子 臂 美恵 稲葉小太郎 利根川 裕

合掌に蕎麦に瞑想の利賀 夏 攸吾

新連載◎念仏信仰の系譜① 須藤隆仙

法然上人を慕う

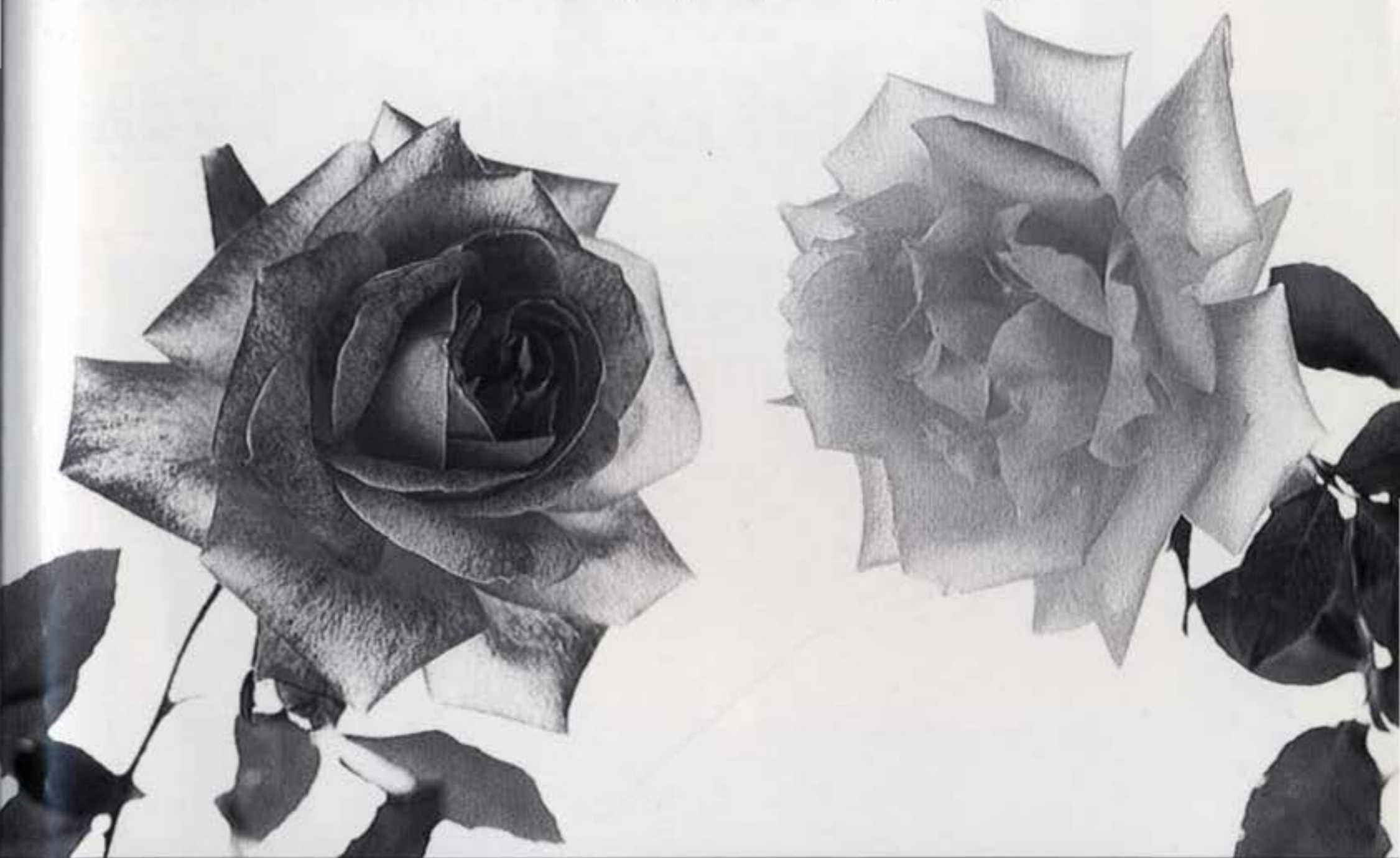
松原泰道



わかり合うことは、

語り合うことです。

以心伝心。古来から日本では、黙っていて
も心は通じるものといわれてきました。
でも、やっぱり話さなければわからないこ
とってありますよね。もっとお互いがわか
り合えるために。日本テレコム・0088
でゆっくりおしゃべりしてみませんか。



0088なら、もっと気軽に、もっと長〜く話せます。

- 例えば、東京(03) ↔ 大阪(06)間なら
25.4%もおトク。
※平日夜7時に15分間電話した場合
- かけ方は、アタマに**0088**を回すだけ。
- 月々の基本料金は一切ナシ。
※NTTの基本料金は従来とおりです。
- 電話機・電話番号もそのまま使え、
ご自宅での工事もなし。

安い市外電話

0088

.....
0088のことならなんでもお気軽にお電話で。
日本テレコムお客様センター
☎**0088-82**(無料)
または、☎**0120-0088-82**(無料)
●受付時間 9:00~20:00(年中無休)

瞑想の利賀

深い谷をきざむ利賀川

写真 夏 攸吾



ネパールの絵師が描いた曼荼羅



辻々に野の仏の小さな祠



利賀そばを打つ



村のいたるところに湧き水



天然記念物、利賀の栃の木

浄土

1993/7月号

目次

瞑想の利賀——口絵……………写真=夏 攸吾 3

今月の随想

生と死のはざまで聞いた声… 小野殖子 8

虚仮の世で考えること……………臂 美恵 12

消えた死体……………稲葉小太郎 16

合掌に蕎麦に瞑想の利賀…写真と文=夏 攸吾 20

念仏信仰の系譜——①……………須藤隆仙 28

生者の運命・死者の運命…利根川 裕 34

法然上人を慕う……………松原泰道 40

編集後記…………… 48

表紙撮影=「落日」落合泰三

生と死のはざまで 聞いた声



小野殖子

妙な言い方だが、私は病気に恵まれてきた。

病気のおかげで、自分の体を通して多くの精神的な贈り物をいただいた、というのが偽らざる実感である。これまでに、両手の指の数では足らぬほどの入院を経験したが、このうちの二回ほどは、あの世の彼岸を垣間見るような体験が

あった。しかし命運に恵まれたというのである。うか、その都度、寿命をいただき、二十代までの生命と言われていた大方の予想に反して、現在に至っている。

はじめての蘇生を体験したのは、昭和四十年二月四日であった。わが国の脳神経外科の黎明

期とも言ふべき時代である。その三年ほど前から頭痛に悩まされていた。夜中の熟睡中でも頭痛によつて目覚めることがしばしば起こるようになったのである。生まれて始めての経験である。とても不安なので、頭痛持ちと自称している友人に「夜中眠っている時でも頭が痛くなることある？」と尋ねてみた。誰に聞いても「そんなことはない」との返事。熱があるわけでもなく、体重にも変化がない。全身くまなく観察しても他には格別の変化は見受けられないのである。ますます不安が深まるばかりであつた。

頭痛に嘔吐が伴うようになった頃から、意を決して内科を受診することにした。胃の中が空でも激しい嘔吐となり、その勢いで思わず手をついて体を支え、ガーガーと、なんとも表現のしようのない人間離れした声が出てくるのである。その頃になると、内科から眼科、耳鼻科に

回されて、精密検査も受けたが確定診断はなかった。その間にも症状は次第に悪化してゆき、嘔吐を伴う激しい頭痛が連続して襲ってくるようになった。昭和四十年の正月はお祝いどころではなくなり、近くの医院に一日に何度も何度も行き来する、異様なあわただしさに明け暮れた。

こんな状態が続くと人は自殺するのではなからうか。それまでは「病気を苦に自殺」などの記事を目にすると、病気にまつわる経済苦や家族関係のもつれなどをイメージしたが、耐えがたい苦痛が自殺の原因になることもあると体験的に理解することができた。

年明け早々に受診した折りに、「このままでは病気の苦痛に耐えられないので、自殺したいほどである」と心境を話したところ主治医は、当時開設されたばかりの東北大学付属病院脳疾

患研究所の病院を紹介してくれた。ここの脳神経外科の責任者は、世界的な名医と評されていた鈴木二郎先生だった。俗に「医者を選ぶも寿命のうち」というが、この出会いは私にとって、何より幸運なことであつた。

診察を受けた結果、過度に進行した脳腫瘍ということとで、ただちに入院ということになった。予期していた最悪の結果が出た。予後に期待が持てないということも納得せざるを得ない。死の影が忍び寄ってきた。

入院のベッド待ちの期間は身の整理をした。死んでからの形見分けよりは生前にプレゼントをした方が、と思いつき、日頃大事にしていた品々を吟味した。そして、世話になった人、心の通いあった人に、それぞれふさわしい物を選んで、日頃の交誼のお礼とともに届けた。誰もが、外見はいつもとまったく変わらない私を見

て、「信じられない」と言いながら励ましの言葉を添えてくれたことが、心にしみた。

みちのく仙台の寒の季節、頬を冷たい風にさらしながら凍てついた道を、検査のために通院した。晴れた空をバックに雪をかぶった泉ヶ岳連峰を遠く望みながら、この美しい世界ともまもなく別れなければならぬかと思うと、すべてが鮮やかで、美しく心に映え、まっすぐに心に届いた。皮膚を射すような冷たい風さえも快いものに感じられた。

入院後、28℃の低体温麻酔のもとで長時間におよぶ腫瘍摘出手術の後、無事に生還することができた。手術のあとの空白のような意識のなかで、絹のヴェールが自分にまつわりついてくるようなイメージがあつた。息苦しくて払おうとするのだが、払っても払ってもまつわりついてくるような感じであつた。主治医は大きな声

で「どうしたんだ」と耳に口を付けるようにして呼びかけたという。その声に自分は精一杯の声で「ヴェールが、ヴェールが！」と言っているのだが、虫の鳴く声ほども声が出ない。でもありったけのエネルギーを振り絞っているのである。いま思い返すと、もし声をかけて下さらなかったら、そのまま駄目になっていたのではないかと、しみじみ思う。この体験から私は、患者にかかわる人は「この人はもう駄目かも知れない」と勝手に決めつけてはならないと痛感する。最後の最後まで患者にかかわり続けて行くことが何よりも大切であると思う。

当時の脳神経病棟には、治療法が見つからないままの難病の人が入院してきた。そして多くの病友が先立っていった。医師とのかかわりを通して、いまなお印象に残っている脳腫瘍だったS男ちゃん、幼くして逝った脊椎硬化症

のU子ちゃん、レックリング・ハウゼン氏病だったM子さんなど、それぞれ忘れえぬ人たちである。死を目前にしたこの人たちの在りし日の姿を思い起こすにつけ、彼らは、年齢の多少とは関係なく、人生が何であるかを悟っていたように感じられてならない。また私は、この人たちから人間の持つ「無限の愛」を学ばせていただいた。人は、本当に大切なことは命がけでないと了解しがたいものかもしれない。

大病とのつきあいが日常的であつたせい、死は特別なものというよりは、やがてくるあの世への席替えのように思うようになった。生きている間は自分の手足を自在に使える幸せを満喫し、そのことに感謝して過ごしたいものである。朝目覚めたとき、誰にともなく「ありがとう」とつぶやき、ひとり微笑している昨今である。

（元看護教師）

虚^こ仮^けの世で 考えること



臂^{ひじ} 美恵

この世は虚^こ仮^け、と仏教では言います。この世は決して真実のものではない、うそ偽りで、仮の世界であるといっています。

とすると、あなたも私も、この鳥もこの犬も、語り笑い、鳴き吠えています。仮の世の仮の

しぐさということになります。めでたいお産も、悲しいお葬式も、すべてが道化者のように、仮の世で泣き笑いの演技をしているようなものです。

五年や十年の歳月ではわかりませんが、百年

過ぎればそのほとんどが、夢幻のように消えています。死も生もないということになります。

しかし、こうはいつでも、悟りを開いたお上人さまならともかく、煩惱具足の私たちにはそうはいきません。ちよつと胃の具合が悪いからといっては、よもや癌では？、とか、ちよつと太り過ぎると、糖尿病になるのでは？、と、その先に控えている死への恐怖にさいなまれます。何時の日か、避けることのできない死の日を迎えるのでしようが、薬や医者に頼りながら、なんとか一日でも長く生きたいと願うのです。

このたび編集部から「死」をテーマの原稿を依頼されましたが、恥ずかしいことに、いままですこの死という深刻な問題に対して、漠然とは考えたことがありますが、真剣に考えたことがありませんでした。

あらためて死という問題に向き合って、少な

からず私は狼狽しました。偽りない話です。まだ死を迎えるには間があるせいかもしれません。それでよくよく考えてみました。

最初に気がついたことは、今、死は私たちの前から、家族の前から姿を消しているということでした。見えないのです。しかし、厳然として死はあるのです。

私の母は六十歳半ばですが、父母兄弟の死に立ち会った話をよくします。癌の苦痛に耐えながら死んでいった人、糖尿病で痩せ衰えた体で旅立った人等、いろいろ語ってくれますが、みな共通していることは、家族が枕辺で看病しながら、慟哭の中で別れを告げていることです。「それにしても○○さんちのおばあちゃん、信心深いけえ、そりやあいい死に顔をしておつたねえ」、「そうそう、あそこのおじいちゃんも、穏やかな顔しておったけえ……」。

こんな言葉も何度か聞かされました。昭和四十年の頃の話です。

テレビドラマでよく死の場面が放映されます。きれいにお化粧した女優さんが、一言二言しゃべりながら、次の瞬間コトリと息を引き取ります。核家族時代の子供たちは、死とはこんなものと思い込んでいるのではないでしようか。実際の死者を見るのは、そのほとんどが病院で、それも鼻や腕に差し込まれた、マカロニのごときゴム管が取り外された後です。病人の、死に際してのうめきも苦しみも知るよしもあります。私の友人の話ですが、婚家先の親が亡くなり、子連れて病院に駆けつけたとき、「汚いから見るのいや」という子供の第一声に愕然としたといいます。テレビで死を見慣れた子にとって、正直な印象だったと思います。虚仮の世で、屋上屋を重ねるように偽りの生活を続けているの

が、現在の私たちの生活のような気がします。醜悪なにもかもさらけ出して見せなさいとはいいたませんが、虚仮の世とはいえ真実を隠蔽しすぎるのもどうかと思います。

死はあらゆる生き物にとって、避けることのできないものとすれば、やはりその死を迎える心構え、準備が必要だと思います。こう考えていきますと、私は母の言葉につき当たってしまいます。「おばあちゃんは信心深いけえ、いい死に顔しておったねえ」。

信仰心の篤いお年寄りが、よく「もうお迎えがくるから」と冗談めいて話します。お迎えとは、いわずもがな阿弥陀仏の来迎です。阿弥陀仏の本願に導かれて極楽浄土への旅立ちです。おそらくこの本願を疑わない人は、死後の世界、対して安心立命の境地で暮らしていることと、思います。「一生懸命、正直に働いたし、人を

泣かせたこともないから、間違いなく阿弥陀さまが迎えに来てくれる」。心底からこういわれるお年寄りには、もう虚仮の世界で極楽往生しているといつていいでしょう。もちろん、このような話を信じない人も多数いると思います。しかし、果たして死に臨んで、恐怖、不安の念をもたずに息を引き取ることができるとでしょうか。疑問に思います。

最近、仕事の関係で改めて『日本霊異記』という、奈良時代に書かれた本を読みました。景戒というお坊さんの仏教説話の本です。その下巻三十九話に、生まれ変わりの話がのっています。知恵と徳行の二つとも備えた禅師が臨終に際し、来世は王子に生まれ変わる。その証拠はこのホクロだ、といつて亡くなりました。その禅師には下あごに大きなホクロがありました。しばらくして国王夫人が懐妊、王子が誕生しま

した。その王子の下あごには大きなホクロがあったということです。

近代の自然科学に慣らされた私たちにとって、素直に信じられない話ですが、かといって科学がこんなことは真つ赤な嘘と証明することできません。宗教の盲信も危険ですが、科学を盲信するのもまた危険です。少なくとも、死後の世界に現在の科学は無力です。死をブラック・ホールの闇と考えるか、新しい生まれ変わりと考えるか、その違いはまさに地獄と極楽の差があります。死を新しい生命の誕生と考えるとき、死は舞台の暗転のように、再生へのほんの一瞬の出来事と捉えることができましょう。舞台がパツと明るくなつたとき、果たして私たちは、何に生まれ変わっていることでしょうか。こう考えると、死後の世界もまた愉しいという境地になります。

(漫画家)

消えた死体

その朝、ぼくは死体を見た。

二カ月ほど前のこと、いつものように隅田川べりをノロノロとジョギングしていると、厩橋のところ人にだかりがしているのに気がついた。つられて欄干から身を乗り出せば、川の中に、男がうつ伏せになってぼっかり浮かんでいるではないか。転落したときにワンバウンドしたのだろう、コンクリートの護岸の出っ張った部分には、真っ赤な血と脳味噌のような白いものが



稲葉小太郎

べつとりこびりついていた。

刑事らしき男が川まで降りて、死体に紐をくくりつけた。だが、なかなか引き上げようとしていない。そのうち船がやってきて、死体につけた紐を船首に結びつけ、なんとそのまま死体を引っ張って走り始めた。

橋の上から見えていたぼくのちやうど真下を通ったとき、仰向けになった死体の顔が見えた。真っ白で、目と口をポカーンと開けて、人間と

いうよりも人形のような感じだった。

船は橋の真下に隠れて、野次馬から見えないところで死体を引き揚げたようだった。

それ以来この体験についてあれこれ考えている。

三十一歳になる今日まで、こういうむきだし
の形で死体を見たことはなかった。というより、
近しい人間が死んだことも数えるほどしかない
ので、人間の死体を見た経験そのものが少ない
のだ。通夜や葬式で故人の遺体に間近に接した
ことは二回しかない。思い出してみればどちら
の遺体も、さつきまで人間だったという実感は
なかった。まるで蠟かなにかでできた人形とい
う感じだった。

では、人間の死体というのは、単なるモノな
のだろうか。机とかペンとかと同じレベルの、
物質的存在なのだろうか。

最近「死」についてあれこれ論じるのがブ
ームのようで、書店に行けば死に関する本がた
くさん並んでいる。それらは大きく次の四つに
分類できると思う。

①脳死・臓器移植関係

②臨死体験・死後の世界関係

③墓・葬式関係

④デス・エデュケーション（死の準備教育）

関係

である。

①において臓器移植推進論者は、脳が再起不
能のダメージを負うことが死であるという。残
された死体は単なるモノ。モノならばどう利用
しようとするか、という論理で、利用できる部
分は利用する。その死体がいさつきまで誰か
に所属していて、今でもその誰かの形をしてい
るということはいさつきまで重要ではない。

②で語られることは、人間の主体としての精神あるいは魂が、肉体を抜け出てどんな世界に赴くか、である。肉体は崇高なる魂の乗り物、容れ物にすぎない。

③では葬式のと きくらいしか活動しない仏教者や葬式業者への批判が主なものだが、告発する当人はもちろん死体ではない。死者の家族・関係者である。自分の葬式においてさえも、死体はわき役なのだ。

④は死に対する心構えの教育である。死をどう考えるのか、どのように死を迎えるのかという、文字通り心の姿勢が重要で、死ぬときの身体はどうあるべきかまで論じたものは見たことがない。

近頃の世間一般の状況としては、どうやら死体はモノであるという見方が大勢を占めているようだ。モノと判断された死体は、存在価値を

失い、なるべく人目にふれることなく一刻も早く処理されるべきものとされる。

日本では一年間に、約八十万人のひとが死ぬ。一日二千人の計算だ。しかし、その九十パーセントは病院の中における死。病院の死体はいつたんわが家へ帰ることもなしに、そのまま火葬場に直行してしまうことさえある。現代では、死体が死体として存在できる時間は、極端に少ない。隅田川で死体に接するようなことは、まれである。

ミステリーではないが、死体が消えたのである。

それにしても、なぜここまで死体を隠そうとするのか。もしかしたら、ぼくたちは「死体はモノ」と信じているのではなく、そう思い込もうとしているのではないか。つまり死体に対する恐怖を消すために、自分の優位を確立するた

めに、死体の地位を下げる努力をしてきたように思える。

ところが実は、死体がない世界というのも、コワイものだというのがわかってきた。

ぼくは先頃『コンビニエンス・マインド』（大蔵出版）という本を書いた。これは現代日本の宗教状況を描いたルポルタージュなのだが、二十四時間営業年中無休のコンビニエンス・ストアが全体のモチーフになっている。コンビニというのは極限まで効率を追求した空間で、売れる商品だけが存在を許され、売れない商品はその場に長く留まることはできない。同時に、傷んだ野菜や賞味期限の過ぎてしまった弁当などは即座に廃棄される。いってみれば、商品の死体が存在しない世界なのだ。

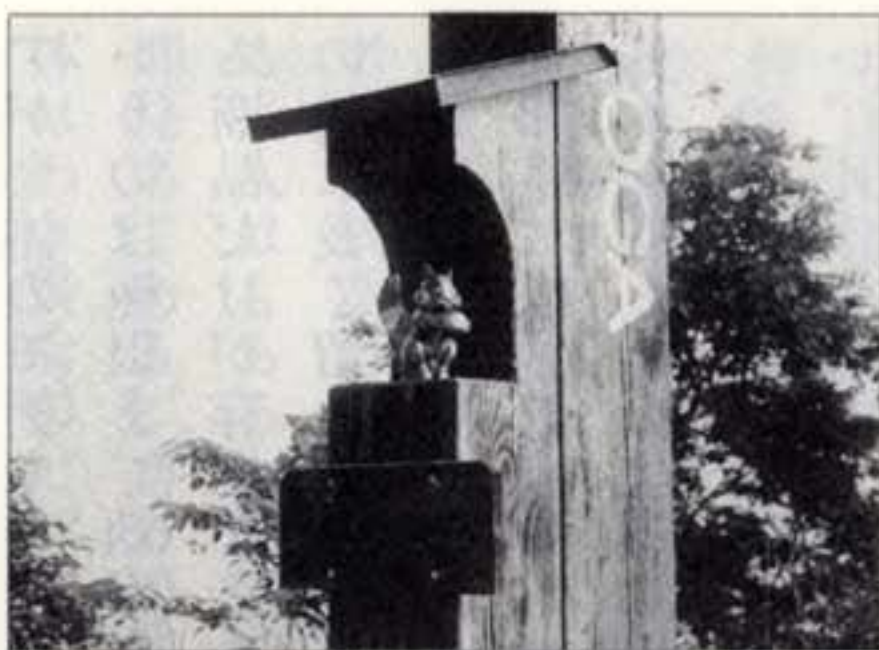
今の日本は、このコンビニと同じかもしれない。死体を筆頭とする無用の物、アナキーな

ものは存在を許されない。極限まで効率化された世界。決められたレールの上を全速力で走っているうちは気づかないが、いったん立ち止まるとたちどころにはじき飛ばされてしまう。居場所がなくなってしまう。そんな世界ではないのか。

ところで死体がモノとされ、存在を消されたことをつきつめて考えていくと、生きている人間にとっても身体価値が低下していることに気づく。だから、ぼくたちにはほんとうに生きていくという実感が薄い。

拙著では、その実感を取り戻すために、宗教は存在するのだと考えた。つまり宗教^{ボディ}身体^{ボディ}というわけなのだが、どうも最近^{ボディ}は若いのに図体ばかり大きくて中身のない宗教や、経験は豊富だけれど運動不足気味の宗教が多いような気がする。

（ライター）



リスがガイド役の道標

合掌に蕎麦麦に 瞑想の利賀

文と写真 夏 攸吾

明るく開けた、僻遠の里

訪れてみたいと想いながら、なかなか

果たせない土地がある。たまたま、巡り

あわせにすぎないのだが、度重なれば妙

に気おくれがして、「やっぱり縁がなか

ったのかなあ」などと考えてしまう。人

間なんてホント、おかしなもんだ。

利賀村を、ご存じですか。

富山県の内陸南端、五箇山のあたりと

いえば、おわかりいただけでしょうか。

北陸自動車道を砺波インターでおり、

国道156号を南下する。散居村の砺波

平野を抜け、欄間彫刻の井波町、かつて

の秘境五箇山を通過して、岐阜県の白川郷

に至る山深い道。

放浪癖にどっぷりつかつた青春時代、
一日一便それも乗り継ぎという、超不便
なバスにゆられて通って以来、気にいっ
て幾度もきていながら、利賀村には入っ
たことがない。

そこは最奥、どんづまり、出口なし、
そんなイメージで、なんとなくこわかっ
た。

私^{わたし}のような寂しがりやは、なんのこた
えない、ちよつと寂しいのは好きなくせ
に、寂しすぎちゃいけない天の邪鬼^{じやぐ}、臆
病者である。

はじめての利賀村への道は、国道が庄
川に出逢う小牧発電所の先で、左に折れ
る。こしらえたようなパステルの碧^{あお}、庄
川の水色には物の怪^{もののけ}の潜み棲む気配^{きはい}が匂
う。



合掌の里の利賀民俗館

すぐ急な登りにかかって、通い船を浮かべる庄川を見おろす。この通い船に乗って、一軒宿の秘湯、大牧温泉には行つたことがある。そこも利賀村だから、正確には、はじめてとはいえないのだが、脚は船だけの隔絶境、おなじ村内の実感はなかった。

見知らぬ土地の場合、印象に与える天氣の影響確率は五〇パーセント以上といつていい。臆病者の僻遠行は、好天がなによりの味方だった。

道はまもなく庄川を離れて支流の利賀川沿い、嶮岨けんしゆんのほどを物語る覆道、隧道すいどうの連続で高度を上げて行き、川はどんどん眼下の緑のなかに遠去かる。

舗装の路傍にお地藏さんの小祠、幾つもお不動さんも混じる。あとで村人に尋



村おこしの原点、合掌文化村



利賀村で

ねたら、ほとんどが往来や道普請で倒れた人たちの供養とのことだった。「脇谷の水」なる名水を見つけて喉を潤す。現在のように車やバスの通う以前、村から井波の町まで歩いて四、五時間の道のりを、達者な者は日帰りしたという。そのころからの行人の泉だろう。

一方、太い木柱の道標に鑄造のリスをのせ、休憩処「みどりの一里塚」を設けて、開かれた村のアピールもある。そういえば、村の中心までインターから一時間ほどなら、なるほど遠くはない。

そうして、集落がみな思ったより明るく開けているのは、目の前も背後も高く大きな山嶺であり、間の谷もまた大きいからだった。

道はすべて坂道、これがいい、リズム

がある。水が豊かなのもいい、潤いを生む。湧き水がいたるところに音をたてている。

利賀の村の木は栃、シンボルの「利賀の栃の木」は「水持ちの栃」とも呼ばれる。推定樹齢七〇〇年、国の天然記念物の老樹の根本から湧く水は「だいじな御仏供水ですよ」と、清冽な山の水で野菜を洗いながら老婆が教えてくれた。側溝を流れる水は、傾斜が急なのでほとんど奔るよう、淀んで濁るひまもない。水の流れのほとりには、きまって小さな仏の祠、野の花が一輪かざられている。

私はふと、笹舟のことを想った。雨のあとの小川に笹舟を浮かべ、友だちと、互いに競いながらどこまでも、追いかけて行った幼い日の記憶。だけど、あの流

利賀村で



れはこんなに早くなかった……。通りすがりの子に声をかけたら、案の定、笹舟遊びは「したことがない」と首を振った。野の遊びと、山の遊びの違いである。その子が通う小学校の校庭の隅には、水車がまわり、標柱には「東経一三七度一分四四秒、北緯三六度二七分一五秒、標高五三五メートル」とあった。もちろん、人家や田畑はもっと高所まで這い上がっている。

空気のうまいこと。深呼吸をくりかえされて私の煙草のヤニ肺、びっくり仰天だ。

いい容れ物には、いい中身……

民宿の夕食の膳には、（これが愉しみだった）蕎麦。蕎麦粉一〇〇パーセント、



こつお館の利賀そば

自家製粉、もちろん手打ち、つなぎの卵が家庭風。太めでぼつぼつと短く、歯ごたえのいいのを、温ったかい汁蕎麦にして食べるのが「利賀蕎麦」という。鯉出汁の、うす味つゆが蕎麦の持ち味をたすけ、薬味の葱がひきたてる、素直なおいしさ。いうまでもない「おかわり」もう一杯。飽食の時代なんて、なにかの間違い、

味のシンプル・イズ・ベストを忘れたくない。

この民宿の主人夫婦は、利賀らしい味で来客をもてなそうと、休耕田で蕎麦づくりを再開したのだが、「山の焼畑ほどは穫れない」といった。もともと救荒作物の蕎麦は、美田や美畑とは縁がない。

土地の九七パーセントまでを林野が占める利賀に限らず、蕎麦の産地はみなそういうところだ。五箇山地方では古くから焼畑を「ソーレ」と呼び、利賀村には「草嶺」の地名がのこる。

それともう一つ、あとでだしてもらった蕎麦湯、これがまたよかった。こつくりと、まさしく蕎麦のスープである。蕎麦を語って、蕎麦湯にふれないのはおかしい……というのは、いい蕎麦は蕎麦湯

もうまいもんだからだ。

翌くる朝、合掌文化村へ。昭和五一年、鈴木忠志氏ひきいる劇団SCOT、もとの早稲田小劇場がここを演劇活動の拠点にしたのが、山村利賀、変貌のはじまりだった。合掌劇場やギリシヤ風の野外劇場を舞台に催される世界演劇祭「利賀フ



あちらにもこちらにも野の仏

エステイバル」が、異色の地方文化として注目されている。

キャンプ場もある合掌文化村の、前を流れるのは神通川じんつうがわの支流、百瀬川。谷深くえぐって流れる利賀川にくらべ、こちらには河岸段丘が穏やかな表情を見せていた。この川沿いの道はやがて、「越中おわら風の盆」の八尾町やつおにいたる。また、ほかにも五箇山の平村や、岐阜県白川村に抜ける道が通じており、現実の利賀は明るく開けた文化村。私が抱いてたイメージとはおお違い、ごめんなさい……。『利賀そばの郷』は、合掌文化村につづく村おこし施設。世界の蕎麦資料を展示する「そばの館」、体験もできる「そば打ち館」、舌鼓うつ「ごつつお館」、そばの郷温泉」など。演劇よりもっと身近なも

のを、というわけである。「ごつつお館」を仕切るのは、都会で料理修業を積んだUターンの若い衆。玄人らしくつなぎなしの純蕎麦を打ってみせ、切り方も垢ぬけて細い蕎麦は、ざるでつるんなめらかな喉ごしを味あわせる。店には、ついで道では見かけなかった娘さんたちが働いており、過疎対策にもなっているようだった。

そんな利賀村の、もっかの話題は「瞑想の郷」。蕎麦がとりもつ縁で、原産地の一つネパールのツクチェ村との間に、育まれた友好関係から生まれたものである。伽藍をモチーフとした「瞑想の館」には、ツクチェの絵師が村に滞在して仕上げた四メートル四方の大作、曼荼羅二図と仏画二図が四面の壁を飾る。正面に広大で



厳しい自然に生きる

高く平らな山嶺を望む、ちよつと日本ばなれのした台地という立地もいいのだった。たしかに、瞑想のポーズが絵になりそうな環境である。すっかりツボをころえ、勢いにのった村おこし、という感じ。

だけど……と私は、そこで想う。

「容物をつくるのは、もうこれくらいにしてほしい」のだ。観光客を呼べる施設、

よそとは違ったなにかをこしらえたい気持ちにはわかるが、だいじな中身がないばかりに、形だけのお粗末に終わるものが多い。そんな荒んだ風景に魅力はない。

どこもかしこも都会色に染まりたがる傾向を見れば、結局将来は、ありのままの自然な風景が、いちばんの財産になるだろうことは、はっきりしている。



俗塵をはなれて……瞑想の館

とくに利賀村のような雄大な自然はいい、それだけで素晴らしい、やすらぎである。どんなに便利になつたとしても、「僻遠」のイメージはこの村にとって、がちり頑丈な礎なんじゃあるまいか……。

（作家）



新連載

念仏信仰の系譜①

須藤隆仙

念仏の始原

お念仏信仰の大きな大きな流れについて、
考えてみたいと思います。

お念仏は、いったいどこから始まるかとい
いますと、いうまでもなくお釈迦様のお説法
から始まるわけですが、信心の上から
は、阿弥陀如来様が、まだ法蔵菩薩であらせ

られた遠い昔から始まるわけでありす。

法蔵菩薩の遠い昔というのは、十劫以前の昔とお経様にありますが、その十は実数ではなく、いっぱいという意味で（満数）、しかも法蔵菩薩の前に過去久遠無量不可思議無央数（むおうしゆ）劫にさかのぼって、五十四人ものお様があられたというのですから（『無量寿経』）、それはもう数えることのできない永遠の昔ということとをいっているわけでありす。

つまりお念仏というものは、そういう数えることのできない永遠の昔から、この私たちへの授かりものである、そういうことがいえるのであります。

法然上人は、『選択本願念仏集』その他で、そのことを懇切に私たちに教え示されておら

れるのであります。教えを受けたお弟子たちももちろんその信仰を受け継がれたのでありまして、浄土宗の二祖聖光上人は、ために「念仏とは昔、法蔵菩薩大悲誓願の筏、今、弥陀覚王広度衆生の船なり」と仰せられ（『末代念仏授手印』）、真宗の祖とされる親鸞聖人は、「法蔵菩薩因位の時……希有の大弘誓を超発せり」と唱えられたのであります（『正信念仏偈』）。

このことが人類歴史上にハッキリと具体的な事実となつて現れてきますのが、釈尊即ちお釈迦様の出現でありまして、お釈迦様（以下、釈尊と記す）は、いふなれば、阿弥陀如来様（法蔵菩薩）が考案された「お念仏」のことを、私たちに教え示すためにインドにお

現れになられた、お念仏の眞実を証明するために出現なされた、信心の上からはそのような領解（受け取り悟る）させてもらえるのであります。法然上人はそのことを、「念仏は弥陀にも利生（りしょう）の本願、釈迦にも出世の本懐なり」と明示せられ（『津戸三郎へつかわす御返事』、親鸞聖人も「如来（釈尊）世に興出したもうゆえは、ただ弥陀の本願海を説かんとなり」と力説されているのであります（前掲書）。このことは、釈尊自らも、「如来無尽の大悲を以て三界を矜哀す。ゆえに世に出興して光く道教（仏道の教え）を開き、群萌（むらう）を拯（すく）わんと欲して、恵むに眞実の利を以てす」と仰せられ（『無量寿経』）、また「われ是（こ）の利を見るがゆえに此の言（ことば）を説く」と仰せられて（『阿

弥陀経』）おられるのであります（大乘經典は釈尊の直説ではないとの批判があるが後述）。このようにして、釈尊によって、阿弥陀如来様の大慈悲業であるお念仏が世に弘められてくるわけですが、そこを詳しく考えてみたいと思います。

一部の学者さんの研究では、お念仏などというものは釈尊時代にはなかった、阿弥陀仏の信仰などというものも釈尊時代にはなかった。それはずっと後にできたものである、などと言うのですが、これはものの見方による違いだと思います。

例えば、釈尊の直接的な教説が残されているとされる『阿含経（あこん）』などの中にも、念仏の原形的なことがたくさん説かれているのであ

ります。一つ例を出してみましよう。『増一

阿含經』第二に次のようにあります。

世尊、諸比丘に告げたまわく。〃まさに一法を修行すべし、まさに一法を広布すべし。すでに一法を修行せば、便ちすなわ名譽はまれありて大果報を成じ、諸善あまねく至り、甘露味を得て、無為し處しよ（悟りの世界）に至らん。便ち神通を成じて諸の乱想を除き、沙門果におよんで自ら涅槃ねはんを致さん。いかんが一法となすや。いわゆる念仏なり〃と。

念仏を修することによって、善果を得て悟りの世界に至ることができるというのであります。その他、原始經典といわれるこの『阿含經』には、念仏の功德がさまざまに説かれ

ているのであります（念仏の内容については後述）。

そこで考えてみなければならぬことは、釈尊の教えというものの中に、「念仏の心」といったようなものがある。つまり仏教の底流に「念仏の心」というものが、脈々と流動している、ということなのであります。

「念仏の心」というのは何かというと、凡夫の私が仏様にすがり切る、ということであります。そこで凡夫が救われて、仏様と同格になる、即ち凡夫が仏に成るということであつて、これこそ「成仏」であり、「転凡入聖」であり、「転迷開悟」であつて、仏教の究極の目的とするところなのであります。

そこでまず、釈尊がどのような歩みの中か

ら、この「念仏の心」というものをご自身の御心の中に組み立てられたのか、そここのころを少し見てみたいと思いますので、釈尊のご一生を通覧してみることにいたします。

「釈尊のご生涯」

まず、「釈尊」とは釈迦牟尼世尊しにの略称なのです。その「釈迦」とは、じつは古代インドのシャーキヤという種族の名なのです。シャーキヤは梵語（サンスクリット語）で、これを漢字で音写して釈迦と書いているわけですが、その訳は「能」であって「能力ある者」の意です。つまりなかなか有力な種族だったらしいのです。ムニ（牟尼と音写）は聖者の意で、釈迦牟尼とは「釈迦族出身の聖者」と

いう意味であります。それでこれを「能仁」と漢訳したりしております。世尊は梵語バガヴァット（薄伽梵と音写）で「世界中で最も尊い者」の意であります。世尊でなく「仏」とする場合もありますが、これは仏陀（梵語ブツダ）の略称であり「覚った人」の意です。さて、この釈尊がいつ世に出現されたかといえますと、紀元前六二四年説、同五六六年説、同四六三年説などがあるのです。中村元博士は紀元前四六三年説です。月日は中国や日本（北方仏教）では四月八日説が定着していますが、スリランカ・ビルマ・タイ・カンボジア・ラオスといったような南方仏教では、ウェーサーカ（インド歴第二月の名で太陽歴の四月・五月）の満月の日とするのです。

生まれられた場所はといいますと、ヒマラヤ山麓のカピラヴァストウ（迦毘羅衛）国郊外のルンビニー園（現在ネパール領）でした。迦毘羅衛国は日本の千葉県くらいの大きさだったといい、隣りの強大国コーサラ（憍薩羅）国の属国なのでした。

父は国王シュッドーダナ（浄飯王）、母はマヤー（摩耶夫人）でしたが、夫人は近隣のコーリヤ（拘利）族の王の娘で、六牙の白象が胎内に入る夢をみて懐妊し、出産のため実家へ帰る途中、ルンビニー園で釈尊を産まれたのでした。あるマメ科の花を採ろうとしたとき釈尊をお産みになられたといい、安産だったなのでその木はアシヨーカ（無憂）樹と名づけられました。

このように書いてきますと、釈尊は、小国たりといえども国王の子として生まれ（学者は国王とはいっても執政官程度だったともいうが）、花の園で生まれられたというのですから、それはそれは幸せな誕生だったということになるのですが、この後が大変なのであります。じつは次に起きる事件こそが、仏教というものの出発となるのであります。

それは摩耶夫人が、釈尊をお産みになって七日後に亡くられるのであります。産後の肥立ちが悪く、嬰兒を残して此の世を去られるのであります。

このようにして、釈尊はかわいそうに、生まれて間もなく母親のない子になってしまうのであります。

（つづく）

生者の運命 死者の運命

利根川 裕

東京下町の谷中墓地に、幸田露伴が『五重塔』の素材とした塔があった。

三十年あまり前の夏の夜、その塔が炎に包まれて焼け落ちた。若い男女が塔に火を放って、塔内とともに死んだのである。

そのころのわたしは、この谷中墓地を毎日のように往復する勤め人であった。焼けた日はちやうど夏休みで、わたしは地方の旅宿の新聞でそれを知ったのであった。

数日後の夜、わたしはその無残な焼けあとを

見に行つた。

この墓地には、たくさんの桜の樹がある。塔とともに、その何本かは焼け爛れ、小枝が白い肌をさらしていた。それが、夜の灯りの加減で、まるで枯木に花が咲いているようであつた。若い男女の灰が咲かせた花。桜の季節でもないのに咲いてしまった仇花の夜桜であつた。

夜の墓地は、しばしば男女の密会場所になる。

ことに夏になると、その数がふえる。

そのころは、男女の交歓のためのホテルなど、まだ一般化されてはいなかった。

わたしは、少し自堕落なところのある勤め人であつたから、つい勤め先の近所の安飲み屋で一杯ひっかけたくなり、一杯が二杯、二杯が三

杯と、とどのつまりは数十杯もひっかけ、そのあげく、へどが出るような自己嫌惡と、幾重にも折れ曲つた自己麻痺を抱いて、ほの暗い墓地を歩み抜けるのだが、幾組もの男女のうごめく気配を察すると、ときに酔いが一挙に狂暴に噴きだしたり、かと思えば、酔いが一挙に醒めてしらけきつたりして、要するに自分自身をあつかひかねることがあつた。

そんなとき、わたしはほとんど、塔に火を放つて女とともに死んだ男とおなじ男になりたがつていたのである。

昼日中の墓地は、ひっそりしている。あまり人通りがない。むろん、男女があられもなく、たがいをむさぼっている、という図もない。死

者たちは、墓の中で音もなく眠りつづけている。

ときにわたしは、勤めをさぼったり、あるいは勤めの隙間を縫ったりして、昼日中の墓地へ行って、誰とも知らぬ墓域内に入りこみ、その石段に腰をおろして、ぼんやりと時をすごした。

そして、ふと気づくと、すぐそこに、前夜の男女の過激な交歓の後始末であつたろうものがあつたりした。

死者に囲まれたなかでの生の昂ぶった行事のあと。まだ若かったわたしは、かくしてまた、生と死についての、惑乱した哲学者になるのであつた。

数年前、東京に新しい墓地を設けた。母が死んだからである。

わたしの育った故郷には、利根川家代々之墓と記された墓があつた。祖父のつくったものである。が、道路計画のあおりで、ここの墓地が整理されることになり、祖父が建てた墓もうち壊され、そこに共同墓地が出来上がり、わが家の墓もそこに吸収された。わたしの祖父母と父がそこに入っている。

その共同墓地は共同墓地として、あらたに東京に墓をつくったのである。わたしはすでに、祖父の築いた家屋敷をすべて売り払って東京で住んでいる孫である。生活の利便のために本籍も東京へ移した。故郷にあるのは墓だけだが、

それも共同墓地になってしまった。

ところで、わたしの父は、わたしが四歳にならない前に死んでしまい、だからわたしの母は二十数歳で未亡人となり、以後ずうっと、わたしとともに生きて東京で死んだ。

わたしが東京に墓をつくる気持ちになったのは、一つには、後半生（ほとんど全人生）を東京で生きて東京で死んだ母の眠る地としては、東京が自然だと思ったからである。二つには、すでにわたしが本籍まで東京に移した以上、ここに墓所を置くのが、これまた自然の成り行きだと思ったからである。そして三つには、故郷には共同墓地はあるものの、もはやそれは利根川家そのものの墓ではなくなった、という感慨

があつたからである。

わたしは東京に新しい墓を設けるとともに、祖父母と父の骨をも東京に移すつもりであつた。

ところが、ことはそう簡単にはいかなかった。というのは、故郷の共同墓地にはそれぞれ骨壺に収められた骨が収められているのではなく、みんなの骨がばらばらに一緒になっているとのこと。これでは祖父母と父の骨だけを取りだすというわけにはいかない。

そこで、故郷の菩提寺と東京の新しい菩提寺の住職さんと相談した結果、故郷の共同墓地はそのままわが家の墓地として継承し、わたしは依然、故郷の菩提寺の檀家となる。一方、東京

でも新しい菩提寺の檀家となり、そこに墓地をおく、ということ。そして、故郷の共同墓地にある一握の土を新しい墓地に埋葬する、ということになったのである。

こうしていま、わたしは、ふたつの菩提寺と二つの墓地を持っているわけである。

父があまりにも早く逝き、その後母はずうつと未亡人で人生を送ったのだから、まことに現世の縁の薄い夫婦であつた父母だつたわけで、母の死によつて、この縁の薄かつたふたりを、やつと墓所のなかで末長く一緒にさせてあげられるかと思つたが、以上のような次第で、墓所の中のわが母の骨は、一握の土の父としか眠っていないのである。そういう母の一生だつた、

ともいえる。

東京の雑司ヶ谷墓地、といえ、夏目漱石の『こころ』をすぐ思い起こす。この作品の中の「先生」は、毎月、若くしていのちを絶つた親友Kを悼んで、たったひとり雑司ヶ谷の墓地へゆくのである。

これは漱石の小説でのこと。その雑司ヶ谷墓地には、島村抱月の墓がある。墓というよりは記念碑とでもいった趣きのある自然石の墓には、島村家之墓という文字ではなく、「在るがままの現実に即して 全的存在の意義を髣髴す 観照の世界也 味に徹したる人生也 此の心境を美術といふ 抱月」の文字が刻まれている。

抱月といえは、女優松井須磨子が一対として
思い起こされる。

じつは、雑司ヶ谷のこの墓地は、抱月の死後
間もなく、須磨子が買いととのえたものであつ
た。そして抱月の死後二月目ふたつきにあとを追つてみ
ずから死んだ須磨子は、その遺書で、「何卒私
の死がいをおはかへ埋めて頂けるようお骨
折を願ひとうございます」と記している。

どんなに愛し合っていたにせよ、生きている
ときは、ついに夫婦になれなかった須磨子の、
これが、最後のせめてもの願ひであつたろう。
彼女は抱月とふたりつきりで、墓の中に入りた

かつたであろう。

しかし、ことはそうならなかった。須磨子が
買いととのえて用意した抱月の墓に、彼女は入
れなかった。そしてその墓には、その後、抱月
の妻と、その子どもたちが入っている。

これでは、あんまり須磨子が可哀想だという
有志が、やがて多聞院に比翼塚を建てて、やっ
と抱月と須磨子を一緒にさせてやった。が、そ
こに抱月の骨はない。

生と死。生者にも運命があり、死者にも運命
がある。墓はものいわないが、墓はものいわぬ
声をあげてもいる。
(作家)

法然上人を慕う

松原泰道

煩惱を断てとは告らず

乱れたる心もゆるし

人間の性のまにまに

みほとけの国に

往き生く

この道は誰かひらきし

慕わしの 情けある

われらが祖師や

ここに掲げたのは、法然上人をたたえる今世紀の勝れた詩人、佐藤春夫氏（一八九二—一九六一）の作詩です。私がいつの頃か、何かの雑誌で読んでノートに写しとったので、いま改めて彼の詩集について調べる暇がないのは申しわけありません。しかし上人を敬慕してやまなかつた彼の心情が、この短い詩篇に濃やかに詩^{うた}われています。結びの「われらが祖師や」とある「祖師」は、申すまでもなく法然上人です。

詩人で念仏者の佐藤春夫氏の詩をよく味わつていくと、法然上人の教えが、私たちの胸の中に何の抵抗もなく注ぎこまれていきます。彼がいうように「煩惱を断て」と、上人は決して「告^つらず」おつしやつたことはありません。

ある人が「酒飲むは罪にて候か」と問います。上人は答えて「まことは飲むべくもなければども、この世のならい」と（『百四十五箇条問答』）。

何という温かい教えのお答えでしょう。私はかなり以前に歌舞伎座で演劇の「法然」を観劇したことがあります。法然上人にだれが扮していたか、俳優の名は忘れましたがすばらしい名演技でした。舞台には武士や町人、男女老若の群集が上人のお説法を聞きのがさじとひしめいています。

「まことは飲むべくもなければども、この世のならい」——という上人の意外な一言に群集のさざめきが起こります。観劇席でも低い笑いの声^{こゝろ}が聞こえました。舞台では、泥だらけの農夫とも思われる質問者が、ほつとした面持で上人を見上げます。上人はにこやかに掌を合わせて「南無阿弥陀仏」と称名なさると、群集のさざめきが収まって口々に念仏を称えます。

私はそのとき、かつて私の師から教えられた「流れに随^{したが}って流れに任^{まか}せず」という禅語を

思い出しました。私たちは社会生活を営む限り社会の流れに随わねばなりません。しかし流れのままに流されてしまつては、人間として生きる意味が無いでしょう。そこで流れに身を任せながら、しかも流れに任せない生き方が大切になります。

そのためには、つねに教えを聞き、大いなるいのちに守られている事実を信じることです。

佐藤春夫が、

乱れた心もゆるし

人間の性のまにまに

みほとけの国に

往き生く

この道は誰かひらきし

と、法然上人の教えをたたえるゆえんです。

余談ですが、今はどこへ行つても道路が直線的に整備されましたが、数年前までは曲りくね

った道ばかりでした。その頃、目的地へ行く方向がわかりかねて土地の人に尋ねると、「この道をまっすぐにいらつしやい」と教えられることがあります。といって定規で線を引いたように直線的に進め、ということではないでしょう。曲った道は曲ったままに曲りにしたがっていくことです。人生でも同じです。教えを信じるから、方向が違ふのではないかという心配もなく、教えられたままに、安心してこみ入った、ときには遠まわりの曲りくねっている道をたどって、毎日の生活を送ることができるのです。

私たちは日常の衣食住に些かの不自由もなく、後継者の子ども等も成長すると、「これで先ず安心」とほつとするものです。しかしあつてはならぬことですが、無常の人生ですから、いつ何が起きるかわかりません。生活や家族に恵まれたからといってそれで安心というわけにはい

きません。やはり心の安らぎを得ないと、一身上の大きな事件に出会ったとき自分を失ってしまふことがあります。

仏教は、信心や修行によって得られる安定した心の状態を「あんじん（安心）」と、とくに濁音で呼びます。法然上人は、安心を得たいのなら、つまり心の安らぎが欲しいのなら、「すべてをさし置いて、南無阿弥陀仏とご名号を称えよ」とお教えです。すなわち「念仏ねんぶつ為先いせん（念仏を先きとす）」のすすめです。上人はさらに言葉をすすめて「間断なく常に念仏の行を修めることが、そのまま阿弥陀仏のご本願に合致する。

また時間の長短を問わずお念仏を続けることが、正しく定められた往生極楽のための実践である」と申されます。

かつて藤吉慈海法主（当時、鎌倉光明寺ご晋山）が、

口に南無阿弥陀仏と称えることに、何の宗教的意味があるう、と疑う人も多い。しかし真理はきわめて単純であつて、口に南無阿弥陀仏と称えているうちに、それは静かに降りてくる白雲のように、いつのまにか下界を銀世界にしてくれるのである。学問も知識もない老婆でも、南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏と称えているうちに、身心ともに浄化されて仏菩のような心になつて行くのである。そこに本願の不思議な力がはたらいている。念仏体験の世界と言うべきであろう。（「大法輪」四十一卷五号）

とお話されたことがあります。本当に法主のおっしゃる通りです。

私ども「南無の会」では毎年夏期に「南無行なんぶぎょう」といって、各宗派のご本山で二泊三日の行をさせていただいています。それぞれのお宗旨の定

める作法によつてご指導を受けるのです。日蓮宗のご本山ならお題目、禪系の本山では坐禅という風に、本年はその第十七回の南無行をいたします。

数年前に、長野善光寺の大本願で何回目かの南無行をいたしました。その年は例年にならない暑熱の厳しい夏の日が続きましたが、そのときとくに設定していただいた別時念仏行の感激は今なお鮮烈に身体に遺^{のこ}っています。汗ですっぱ抜けそうな木魚の柄^えを握りなおし握りなおしして、高声念仏をかなり長時間続けました。高声で称名を続けるうちに、藤吉慈海法主のお話のように、私どもの心中が透明になっていくのを覚えます。はじめのうちは声も小さく「私が称名している」という自我意識を感じましたが、木魚の音が冴え高声になるにつれて自我意識がいつの間にか「南無阿弥陀仏」の称名に昇華されて

いました。念仏行を終って部屋に戻ったとき、ふと法然上人の「いけば念仏の功つもり」のお言葉が頭の中に浮かびました。

雑誌「大法輪」が昭和四十九年五月号で「法然上人開教八百年」の特集号を発行しましたが、編集後記に相応する巻末のコラム欄「脚下照顧」で、編集者が次のように記しているのも印象的です。

法然上人に牽かれるのは、その永い生涯は戦争反対。仏教の平和主義で貫かれていたことだ。戦争反対で生きぬくことのむずかしさは誰でも知っている。それを敢えて守りぬけた上人は、なみなみならぬ素質をもった宗教者であつたことを物語っている。

法然上人（幼名勢至丸）が、九歳といういまだ小学生の年齢で大切な父の時国^{ときくに}が、他者のために命を奪われます。当時の社会通念からす

れば、当然時国は勢至丸に復讐を托すべきです。しかるに時国は「敵を恨むな、恨みを恨みて返すなら、永劫に恨みの果てることはない。恨みを解脱するの道を求めよ」と言い遺すのです。

幼年の勢至丸が、哲理に満ちた父の遺言をどの程度理解されたかはわかりません。しかし父の願いが勢至丸の心に深く根をおろし、彼の成長と共に、父の願いが仏の無限大の誓願に彼の心中に充ち満ちたであろうことは想像されます。

勢至丸が法然と改名されたのは、ただ名前の変更に止まるものではありません。勢至丸の心中に生まれながらに備わっていた仏のいのちの開發かいほつが示唆されます。恨み心を解脱するだけでは不十分です。恨み心を逆縁としてさとりを求める菩提心に転じて仇敵を幾重にも温かく包んで、はじめて仇も怨みも仏心に接摂されるのです。修行時代の上人が、私たちがとても想像で

きないほど『一切藏經』をくり返し身読されたのも、仇を恨む心を仏心に昇華する教えを得たいからです。そして『法句經』五番の、

うらみごころは いかなるすべをもつとも
うらみを懷くかぎり うらみの止むときなし
うらみを超えてのみ うらみは消ゆる
べし

の詩句に出合われたとき、上人は、きつと亡父との邂逅の感激を感じられたでしょう。そして「うらみを超える」大菩提心を觀念ではなく、真実わが身に備えるにはどうしたらいいか、と次から次へと起こる難問を解きほぐして、ついに専修念仏の道をお開き下されたのでありましよう。このことは、後に法然上人が、

たがひに順逆の縁むなしからずして、一仏
浄土のともたらむ（『黒谷上人語灯録12』）

と、述べられたことで教えられます。また法然

●今月号の巻末を飾っていた松原泰道師に執筆のお願いをしたのは六月の半ばだったが、師は沖縄への講演旅行中とのことなのでご自坊宛に依頼状をお送りした。すると早速、師から「ご下命の原稿のこと、執筆内容委細拝諾致します。何かと勉強して執筆、締切日までに拝送いたしたく存じます」というハガキでのご返事を頂戴した。さらに後日、お送りいただいた原稿には達筆の手紙が添えられ、中に「本当にお役に立たない事と存じますがお許し下さい」とのお言葉があった。長い編集者生活でも、これほど鄭重な執筆者には接した記憶が一度もない。ありがたいことと、この欄でも改めてお礼を申しあげる次第である。

●かつてこの国に今井田勲という名編集者がいた。文春の池島信平氏と朝日の扇谷正造氏を心から尊敬し、自らも雑誌作りに生涯を傾けた人物である。私はその今井田氏から直接雑誌作りの心やノウハウを学んだが、氏の言葉で今も忘れられないのは、雑誌は読者より一步先では多すぎる、絶えず半歩先を行く努力をせよ、といったことや、雑誌と書籍は違う。雑誌は横になり、寝転んで勝手に読めるから雑誌なんだ、といった基本の信念である。

●前号のこの欄で「雑誌は書籍のような重さがあったては雑誌でなくなる」と書いた私の記事に誤解があったとはいかないので、あえてまた記した。重さは必ずしもウエイトのことばかりを指すのではない。好況だった一時期、広告が多すぎて雑誌の重さが一キロを超えたのを最も憂えたのも今井田氏だったし、利益採算ばかりを優先させる業界の姿勢をきびしく糾弾したりもした。同時に、教育の恩恵を受ける機会の少ない、子女の啓蒙誌だった歴史も持つ「主婦の友」誌の編集を戦前、戦後十六年も手がけた氏は、絶えず雑誌というもの、の新しい位置づけに苦勞していた。

●この「浄土」が、はたして読者の半歩先か一步先を行っているのか、私には分からない。ただし、寝転んで読めるから雑誌なのだという、雑誌本来の姿はなんとしても守らなければならぬ、間違っても変型書籍にしてはならないと固く自戒している。

●函館でその人ありと知られた須藤隆仙師の新連載が始まった。約六回の予定である。「旅」のページは菊池東太氏から新進の夏攸吾氏に変わった。芝学園から上智大を卒えた氏はブルーガイドブックスなどで高名である。

(編集チーフ 小川有順)

●お詫び

去る四月に法然上人鑽仰会と浄土宗浄業会が合併して、新法然上人鑽仰会が再組織され、現代のニーズに相応した信仰運動が展開されることとなりました。その後数カ月を経過しましたが、旧事務所大道社から新事務所明照会館への移転をはじめ、新会則による会員各位の移行手続き、それに伴う会費精算等に思わぬ時間がかかり、併せて、本会の中核をなす「浄土」誌の刊行が、四月特別増大号以降遅延をいたし、会員読者各位には大変ご迷惑をおかけいたしましたことを深くお詫び申し上げます。ようやく見通しがつき、準備期間として五・六月を合併にさせていただき、今後もしばらく毎月発行予定が遅れますが、事情ご賢察の上今しばらくご理解の程よろしくお願い申し上げます。(編集人・宮林昭彦)

浄土 五十九巻 七月号 頒価五百円

昭和十年五月二十日第三種郵便物認可

印刷 平成五年六月二十五日

発行 平成五年七月一日

編集人 宮林昭彦

発行人 牧田諦亮

印刷所 株式会社文化カラー印刷

写真植字 文化フォントタイプ

〒一〇五 東京都港区芝公園四・七・四 明照会館内

発行所 法然上人鑽仰会

電話 〇三(三三五七八)六九四七

結局、 黒ラベル。



いつでも・どこでも・誰とでも……

楽しく飲める〈黒ラベル〉。

サッポロ〈生〉黒ラベル

人間のやさしさをクルマに。

すっきりが、いい。

新しいローレルと、日本。



浄土 第五十九巻 第七号 (毎月一回一日発行) 平成五年七月一日発行 昭和十年五月二十日第三種郵便物認可

頒価五百円

Photo:ローレル25ツインカムメダリスト(オプション装着車)



松方は、**◎**りゃあいいと思った。

◎本木は、**◎**るほどと感心した。

◎方・**◎**木の**◎**ローレル評判記。LAUREL誕生。



松方:直線的なスタイリングが新鮮。こんどのローレルは端正だ。本木:キャビンがゆったり、視界も広い。すっきり運転できる。

ローレル 25 ツインカムメダリスト 全長4710×全幅1720×全高1380(mm)/主な装備●R25D2(16バルブツインカム・総排気量2498cc)エンジン●最高出力130PS/6400rpm(※NET値)●最大トルク23.5kgm/4800rpm●フルタイム電子制御5速オートマチック●電子制御パワーステアリング●オプションセーフティロックシステム●ローレルサウンドシステム/(※NET値)とは、エンジンを車両に搭載した状態とは異なる条件下で測定したものです。
●日産自動車株式会社お客様相談室:東京Tel.(03)3545-2323/札幌Tel.(011)722-8823/名古屋Tel.(052)951-8823/大阪Tel.(06)536-1123/福岡Tel.(092)451-8823 お近くのローレル販売会社へ